ささぐり紀行　その六十一

第三十五番札所　珠林寺薬師堂

4番札所から35番札所への道は、ニシキゴイの泳ぐ「いこいの小川」が話題となりますが、歴史好きはドウノモトを取りあげたくなります。

遍路道の途中、右手の田んぼの中にある少しこんもりとした一画で、石塔と梅の木が立っています。ドウロモトとも言われますが、堂ノ下と書いたのでしょうか。塔ノ下、堂ノ元、唐ノ基かもしれません。専門家は古墳ではないかと見ています。また、上に立つ石塔は16～17世紀のものと思われ、いずれにせよ、かなり古い由緒を持つことは間違いありません。

さて、35番札所は珠林寺にあります。現在は南蔵院をはじめとして遍照院や延命寺など、お寺が札所になっていることが珍しくもありませんが、篠栗四国が誕生したころは、お寺の札所はこの珠林寺だけでした。珠林寺は金出山放光院と号しますが、明治22年（1889）に荒巻幸右衛門さんが発行した地図を見ますと、かつては金出寺と通ようです。篠栗四国が誕生したころは4番・35番・86番の3か所を受け持っていたと思われます。

そのうち前2か所は、明治30年（1897）に桐生源四郎さんが記録した「明細帳編入願再出願控」によると、天保6年（1835）8月の開創となっています。つまり、藤木藤助さんが篠栗四国を完成させる以前に発起人の尼の慈忍（じにん）さんが造顕（ぞうけん）した石仏像をまつっていたと推測できるのです。

現在も珠林寺で大切に守られている35番札所の石仏は、発起当初のものだと思います。篠栗黎明（れいめい）期の本尊像は、わたしたち研究者の間では天保仏と呼ばれていますが、天保仏を祭った札所は、1番札所など、わずか17か所だけでした。それから少ない天保仏も、現在は多くが行方不明です。

35番の薬師像は保存状態もよく、今でも後背に銘文を読み取ることができます。薬師像の右上には「三十五番」、左上には「上座郡星丸村恵助」と刻まれています。どうやら、この石仏は現在の朝倉市杷木星丸に住んでいた恵助さんという方が建立資金を奉納したようです。

しかし、なぜ篠栗から遠く離れた杷木の人が仏像を寄進したのでしょうか。篠栗から本場の四国霊場へと向かうには、杷木を経て大分県に入り、豊後水道を佐田岬へと船で渡る道もありました。慈忍尼は四国遍路の帰路に篠栗を訪れたという伝承もあります。このあたりに篠栗四国開創の謎を解く鍵がありそうです。

日仏共同篠栗民俗調査団
慶應義塾大学非常勤講師
中山　和久

篠栗歴史遍路編（その9）